

北村篤子

あひよし

上卷



あひじ

上卷

北村篤子



検印廃止

あおによし 上巻

定価 五〇〇円

昭和四十七年十二月五日 第一刷
昭和四十七年十二月二十日 第三刷

著者 北村 篤子

発行者 浅沼 博

印刷 東洋印刷株式会社

製本 田中製本株式会社

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

©1972 Atsuko Kitamura

0393—005014—6023

目次

あ	あの山越えて	五
初	初恋	三
北	北風の季節	六
お	お水取り前後	九
若	若葉青葉	二七
大	大安吉日	一四
初	初霜	一六
蟬	蟬しぐれ	一九
誕	誕生	三六
明	明日の風	四六

五 三 六 九 二七 一四 一六 一九 三六 四六

裝 題
幀 字

森 望
田 月
曠 美
平 佐

あおによし

上巻

あの山越えて

一

とも代が、奈良の「みやこ館」へ、はじめて女中奉公に上ったのは、昭和五年。十八歳の秋であった。

「行かせとうない……」

母のおよしは、反対だった。

「せっかく、あこまで大きした娘を……それも、嫁に出すというならともかく……」

夜明けの薄暗い土間で、かまどの下を焚きつけながら、およしはそっと、手の甲で涙をふいた。

「ええやないか！……本人がどうしても行きたい言うのやから、なにもわしらがゴチャゴチャ言うことないわ」

長男息子の平作が、まだ眠い目をこすりながら、横合いから口を挟んだ。

「なあに、じっきに泣き面して、もどって来よるわい……」

山家育ちの山ザルに、都会暮らしがそう簡単に勤まっていたまるものか、と平作は言うのだが、それは半分、母のおよしを慰める言葉でもあったのだ。

裏山の峯の頂が、うっすら白みかかっている。

どこか遠くで、目をさましたばかりのつくつく法師が鳴いているほかは、なんの音も聞こえない……。どちらを向いても、深みどりの山々に囲まれた、ここ奈良県吉野郡十津川村は、面積が県の五分の一を占めるといふ、全国でも屈指の大きな村である。だが、そのほとんどが山林であり、耕す土地は極端に少ない……。とも代が生れ育ったこの村は、長い間、陸の孤島と呼ばれる秘境であった。

（大丈夫かのう……）

妹のはな代も、母のおよしや、兄の平作と、同じ思いであった。

「なあ姉ちゃん……。そやけど一人で、そんな遠いところへ行っても、コワイことないか？」心配げな妹の問いに、

「フフ」と、鼻で笑ったとも代は、マキ割りの手を休めると、胸をそらすようにして言った。

「なにが恐いねン。うちは前から一度でもええ、あの山越えたむこうの土地へ行ってみたいと思いつけて来たんやもの、恐いことなんかちつともあらへん」

「けど……。むこへ行ってもたら、姉ちゃんもう、この家には帰ってこられへんのやろ？」

「そらまあうちは、女中奉公に行くのやさかい……」と、いいかけて、寂しげな妹の横顔に気づき、とも代は急いで言葉をかえた。

「けど、手紙書くわ。ちよいちよい手紙書いて、むこの様子知らせたる」

「ほんまに？」

「ああ、ほんまやとも！ 奈良の町には、大きなお寺が、仰山ぎょうざんあるねンて。それでな？ うちが奉公に行く旅館には、そのお寺を見にくるひとが、日本中から来て泊りはるのや、なッ？…わざわざ奈良までお寺を見に来るいうたら、お客さんはみなお金持ちばっかりやもんな、きつと立派な旅館やでェ！ きつと、御殿みたいな家かもしれんなア、ハハ！」

とも代は、すっかり浮々している。

奈良の大きな旅館に見習い奉公に上るといえば聞えはいいが、実際は、貧しすぎる農家にあるがちな、口べらしのためであった。しかしとも代には、まったくその暗さが無い。むしろ、未だ見ぬ土地への期待と憧れあこがで、ハチ切れんばかりなのだ。

「とも代！」

そのとき、母屋の方から、父親の弥助の馬鹿デカイ声が出た。

「あ、お父ちゃん、もう起きたんか？」

「今頃、何してるのや、お前」

「ふん、ちょっとな、マキ割りしてるねン。うちがおらんようになって、当分間に合うようにと思つて……」

「アホ！ なんで今頃、そんなことせんならんのや。ええから早ようメシ食わんかい！ 早よう支度せんと、新田しんでんのお光はんが迎えに来るぞッ！」

「ふん、ほな、すぐ行く。はなちゃん、後頼むわ。おばちゃん待たせたら、悪いさかいな！」
手に持った斧を妹のはな代に渡すと、とも代は急いで、裏口から土間へ駆け込んで行った。

その後ろ姿を見送った視線を、積み上げたマキの山に移すと、父親の弥助は、急に目をうるませ、

「アホンダラめが……」

と、口をへの字に曲げた。

新田のお光は、この村から、奈良の墨職人に嫁いだ女である。

世話好きな性分で、しばらくぶりに里帰りをしに来たついでに、とも代を奈良へ誘ったのだ。髪を結ったり、着物を着換えたり、とも代が慌てて旅支度を整えている間、母のおよしは、迎えに来たお光を相手に、昨夜からの愚痴をまどくどくど繰り返し並べたてていた。

「そやけどなア、およしさん」

お光は多少うんざりして、突き放すように言った。

「ともちゃんかて、もう十八やろ。親がそない心配せんかて、立派に生きて行けるトシやで！」

「へえ、そら判ってるけど……」

「判ったったら、もう言いなさんな」

「けどなあ」と、また元の愚痴にもどって、「ほんまはこの家から嫁に出さんならん娘を、親が甲斐性ないばかりに、一人で苦労させると思うと……」

およしは、泣き声である。

「そんなことないて」

お光は内心、辟易へきえきしながらも、慰め顔で、

「そらまあ女中奉公やさかい、身体を楽させることは出けんかもしれんけど、なににも廊くろわへ身売りするわけやなし、他に何の苦勞があるのや。それはあて、が何遍も言うたやないの！」

「へえ、そら聞いたことは聞いたけど……」

「ほなもう、大舟に乗った気で、ともちゃんの事はあてに委しとき」

お光は、ポンポンと、灰をはたいて、キセルをしまうと、

「それよりともちゃん、まだかいな。陽が出てからでは遅すぎるで」

と、腰を浮かした。

そのころ、十津川村から奈良に出るには、まず川津までの山道を、歩かねばならぬ。距離にして、二十数キロ。時間にして、五、六時間。この間まったく、交通の便がなかったのだ。

「ほな、とも代……達者でな」

「お母ちゃんも、身体に氣をつけてや」

泣くまいとしても、自然に涙があふれて出る。

そんなとも代を叱りつけるように、父の弥助が大声で言った。（山の男は声が大きいのだ。）

「早よ行け！ バスに乗り遅れたら、どもならんぞッ！」

川津から五条までは、ようやくバスが開通していたが、これが文字通りのガタバスで、運転手は乗客より、エンジンの機嫌をとるのが大事。急な坂道では、客を降ろして後押しをさせるといった具合で、そんな調子だから、余程うまく走っても、四時間はたっぷりだった。しかもこれが、一日に僅か一往復というのだから、大変なバスである。

その先がやっと鉄道になって、五条から奈良までは約二時間だから、延々十数時間——生れて初めて村の外に出たとも代にとっては、まずはかなりの強行軍だったといえるだろう。夜明けに村を出て、奈良へ着いたときは、町は既に、青い夕闇に包まれていた。

二

「な、あれが若草山や。その手前の大きな屋根が、東大寺の大仏殿……」
街角に足をとめて、お光が得意そうに説明をする。

「こちらが、興福寺の五重塔や……」

初めて目にした古都のたたずまいに、とも代はただ茫然と、心を奪われていた。
何やら、自分でもわけの判らぬ感動がさざなみのように胸に打ち寄せる……。

これが、とも代と奈良との初めての出会いだった。

「さ、ほな行こか。こっちやで、ともちゃん」

ハッと我に返り、とも代は慌ててお光の後を追った。

広い通りを横丁にとり、更にいくつか辻を曲って、やがてゴミゴミした裏通りに出た。

お上りさんよろしく、キョロキョロと辺りに目を奪われながら通りすぎようとするとも代を、お光が慌てて呼びとめた。

「ここやここや。何処行くのやともちゃん」

「……へ？」

びっくりして振り向くとも代に、

「ここがあんたの奉公先や、ホラ見てみ」

軒先にぶら下った看板を指差すと、お光はさっさと中へ入って行った。

「へーえ、ここが……？」

とも代は、うさん臭げに看板に近寄ると、その字をシゲシゲと眺め、

「『みやこ館』……ほんまやわ……」

といささか気落ちしながら、あまり上等とはいえぬ店の構えを、無遠慮に見まわした。

「けど、困ったなァ……」

お光は額に手を当てた。

宿の女将は、急病の客につき添い、病院へ出かけてしまつて、留守なのだそうだ。

「しゃあない、ともかく入つとろ」

表の通りから、玄関内を覗き込んでいるとも代を手招きして中に呼び込むと、お光は男衆の仙吉に、

「この子な、ともちゃんいうて、やめた春ちゃんの後釜に頼まれとった子や。あてとこの村の子やさかい、あんたもこれからよろしゅう頼むで」

と、とも代を引き合わせ、とも代には、

「この人はな、仙吉さんいうて、ここの男衆はんや。なんや、けったいな人やけど、根は悪い

人と違うさかい、あんたも判らんことがあつたら、なんでもこのひとに聞いたらええわ」と、仙吉を紹介した。

なんだか知らぬが、男のくせに赤い襷たすきをかけたりにして、確かに変な奴である。

「あの……」

とも代は、ジロジロ相手を観察しながら、お光にとも、仙吉にともなく、問いかけた。

「男衆はなんて、何する人だす？」

「へえ？……へえ」

仙吉は、一寸つまって、頭を掻き、

「それはまあ、いろいろと……風呂をわかしたり、下足入れたり……時々はこないして、メシ炊いたり……」

横からお光が、

「ま、早い話が男の女中や。な、仙ちゃん」

「へえ、まあ、そんなところで……ハハ！」

仙吉は意味なく笑いかけたが、すぐエヘンと笑いやみ、

「ま、とにかくこっちゃんえ上って下さい。お光さんもうぞぞ」

先輩の威厳を示そうと、無理に四角張った声でいった。

「ふん、おおきに。けどうちは……」

お光はとも代を窺うように見て、

「あてちよつと、家に帰って来たたらあかんか？」
と、聞いた。

「イヤ、そうかて、おばちゃん！」

まごつくとも代に、

「いやいや、また来る。ちよつと家に顔だしたら、じき来るがな。なッ？ ……もしその間におかみさんが戻ったら、あてが連れて来たこと言うたらええのや。それともやつぱり、一人では心細いか？」

「いや、そらうちはかまへんけど……」

とも代は、お光の袖をひっぱると、声を潜めて言った。

「けどな？ おばちゃん……なんやこの家、大したことないな」

「……へえ？」

「そうかてうち、もうちよつと立派な家やと思うてたのに……」

不満顔のとも代に、

「イヤ、そやけどな」

お光は少し慌てて、

「旅館いうもんは見かけと違うねんで。大事なんは客種や。そら、この家は見かけは大したことないかもしれんけど、泊りはるお客さんは、みな偉いひとばかりで、どこの旅館にも絶対負けへん」

論^きすように言いきかせているところへ、

「コンチワ！」

客が入って来た。

「あ、お越^こしやす」

仙吉が目ざとく見つけて、

「しばらくでんな、竹田はん」

愛想よく笑顔で迎えに出た。

とも代が振り向いてみると、見るからに貧乏臭い書生風の男が、入口に立っている。

「やあ、しばらく。部屋あいてるかい？」

馴染の客らしい口のききようである。

「へ、ちょうどこの前の角部屋が空いてますわ。今度は何日ぐらいお泊りですか？」

「うん。それが相変らず、フトコロと相談なんだけど……いや、実は今朝、目がさめたら急に、三月堂の月光菩薩^{がっこうぼさつ}が見たくなっちゃったもんでね……」

「ハハ、それでまた、フラッと汽車に乗ってしもたいうわけですか。ま、ええから上って下さい。フトコロの相談は後でけっこうですよって」

仙吉は、客を案内して二階へ上りかけたが、階段の途中で足を止め、

「あ、そちらさんもどうぞ、早よう上って足をのばしとって下さい」

とも代達の方に声をかけた。